

吹田市佐井寺 風土記こぼれ話 (三)
編集 部

山田寺 (佐井寺) 観音様の地藏盆会

八月二十四日の夜の帳(とぼり)がおりると、毎年絶えることのない行事が、盛大に繰り返し営まれる。広い境内一面に数え切れない程の、沢山の可愛らしい、豆電球付きの提灯がぶら下がり、かすかに揺れている。その淡い光りが、雨上がりの木々の諸葉(もろは)に生えて美しく、見惚れている内に、浴衣姿の少年少女達が、大勢集まって来てははしやぎ廻っている。慶安二年鑄造の銘ある由緒深い大梵鐘は、静かな佐井寺の中空に余韻を響かせている。大東亜戦争に際し、この銘あるがために、軍部も徴発を躊躇したので難を免れたのである。

有志による御詠歌の奉納が終わると、住職の読経裡に、少女達の御詠歌踊りが、一層の興趣を添える。善男善女の参詣引きも切らぬ有様で、平素は広くて涼しい境内も人いきで蒸し暑く感じる。やがて御詠歌団一行の、御詠歌踊りが始まる頃には一層の人手となり、この街久々のにぎやかな夜が更けてゆく。

(三八・八・二五)

幾十年か前のこと、現在の数十階もある石段のところを改修した際、お地藏様が続々と出てきた。その所を以前には「キララ坂」といって、藪が茂っていて土手のような所であった。この石段は上田氏が独力で寄進されたもので、現在は市の中央部でお住まいなさっておられるとか聞いている。

その石段を登りつめた傍わらに、当時佐井寺各所に、散在していたお地藏様を、一つところに合祀された。その中に今井音吉という人の宅地内に、祀られてあったお地藏様のも交じっている。このお地藏様は昔から、歯痛と幼児の夜泣きとは特によく効いて下さるとて信仰が篤く、地許だけではなく、他所からの祈願も随分と多かつたらしい。

後日に至りこの沢山のお地藏様を、再度動かし現在の場所へ移された。

去る日私は、もの好きにも数を調べてみたところ、何と百七十体(数読みに一、二体は間違っているかも知れない)もあるのに驚いた。どれもこれも風化の激しいところから察するに、みんな幾百年かを経たものばかりで、当村内各所に散在して祀られていたことと、当村の成立の古いこともよく立証され、当時の村民の帰依(きえ)も相当なものであったことがうかがえる。

百七十体のお地藏様

今は境内の中央鐘撞き堂脇に鎮座しておられる、このように沢山に並べられた、珍しいお地藏様について少し述べてみたい。



20 浅野倉平さんが今年の3月末実際に数え直されました。南側45体 西側37体 北側44体 東側36体 合計172体 (一度しか数えなかったので、数え間違いがあるかも知れませんがこのことです)。なお、本稿の写真はすべて浅野さんにご提供頂きました。

向かい坂峠の十三体のお地藏様も、当時山田寺へ合祀の話が出たけれど、妥協がならず、最初の発見者とお地藏様をお守りしておられる人々の、熱意とが実を結び、現在の地域に独立を続け、毎年八月二十四日夕べの地藏盆会には、欠かさずにぎやかに、回向を繰り返されている。

当地境内のお地藏様合祀を機会に、毎年八月二十四日には回向され、盛大なお祭りが、執り行われるようになったと聞いている。

盆踊り前になるとお地藏様に、各信者から寄進された一つ一つの真新しいよだれかけが、かけられてあるのがよく目立つ。

数多いこのお地藏様の内の五、六体に、舟形石、光背のところがった部分が、半円形に凹んでいるのが異様に見える。これはいつ頃の世代であったかは判らないが、当時の農家の一部の人々が、便宜上石像をつい失敬して、「ジロー」に代用したもので、ついでに踏み台にも……と、無縁になっている墓石を使っていたらしい。

「ジロー」とは米を踏む「キネ」の重心？に使用されるものである。
これも他所ではあまり類を見ない、当山田寺における特異な存在と、いえないことはない。



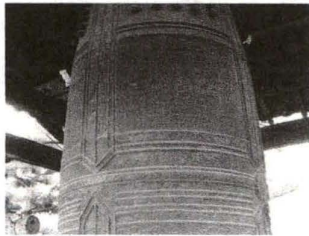
群中に四・五基はある、船方光背の「くぼみ」は当時の農民の生活振りの一端を知る上に重要な課題を興えてくれている。特異な存在の石仏達である。

世が納まれば人心も逐次おちつきを取り戻し、誰いともなく、仏罰の怖ろしさを感じ始め、噂に噂が拡がり、また元の位置に戻して現在に至っている。まことに危ぶいところであった。

その次の危機は前項（16号所載下馬石標について）にも述べた、心ない軍人達のため四本柱に馬が繋がれ、永い期間村人をしてハラハラさせたことも、今は語り草となっている。

次は大東亜戦争がだんだんときびしくなってくる、と、軍部からは徴用の発令がやってきた。けれども慶安二年の刻銘（重複するが）のお陰で御難を免れた。いずれ近い将来には古文化財にも指定される可能性のある、この鐘にもいろいろの話題の含まれた、まことに由緒深い鐘といえる。

四季の折々に蕭条（しょうじょう）たるこの鐘の余韻を、間近に聞くことの出来る私にとつては、まことに有難く、倅せ（しあわせ）の極みである。



徴発を免れた釣り鐘

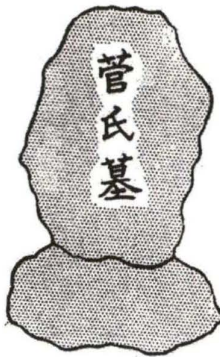
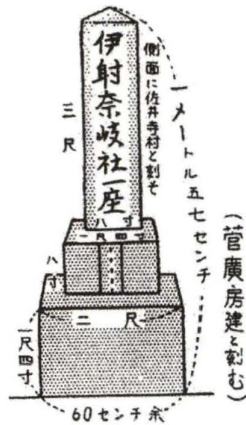
ついでに当寺境内の大梵鐘について、少しばかり誌しておこう。古書に曰く、

前略

降って、天正年中（約三百八十年前）兵火に罹りて、堂塔坊舎悉く灰燼となり、わづかに草堂を建てて、本尊及び諸仏を移したりしも、正保四年（約三百二十年前）に至りて、寺僧「楽順」（らくじゅん）屢々靈夢に感ぜしより、応驗の著しきこと四方に伝わり、賽者一時踵を接するの盛況を呈し、ようやく再興の工成りて、時の領主板倉周防守源重宗も亦崇敬浅からず、梵鐘を寄進せり。銘は京都東寺の長者亮春（りようしゅん）の撰なり。云々。

板倉周防守の母堂？が悪疾の眼病に罹られたとき「おこうずい」（佐井の清水）により全快なされ、そのお札にこの鐘を寄進せられたとか聞いている。これも伝説で真偽の程は判らない。明治の初年諸政の改革、廃仏毀釈の余波は、当寺にまで押し寄せてきた。さる商人から、この大梵鐘の売却を再三の懇請に、村の代表者協議の結果応ずることに一決し、早速と鐘を降ろし、門まで運んで来たところ、門が小さかったためにどうしても出ることが出来ず（門は第一室戸台風で倒れた）その後永い間そのままに放置されてあったが、

伊射奈岐神社殿前の「石標」と「菅広房」



当神社は伊射諾尊（いざなぎのみこと）を祀る延喜式内社である。わが吹田市では最も古い、由緒正しい格式の高いこの神社を、わが佐井寺に戴いていることを、悦び誇りとしている人々の、いたって少ないこと

は、常々寂しく残念でならない。

応仁以来天正の頃までにはしばしば兵火に罹り、文禄年中に草社を営みお祀りしたが、その後享和三年（百六十年前）新たに造営されたのが、現在の社殿であるらしい。明治の五年神仏分離で、漸く日の目を見るに至り村社に列し。明治四十三年には神饌幣帛料供進社として府から指定されたが、敗戦と同時に中止の厄に遭い、いつまたこれが快復されるやら、前途甚だ遠慮である。

さてこれからが私の言いたいところである。

本社殿の前右側に、方八寸、高さ三尺、二段の台石に作成された石碑がある。その台石に刻まれた文字は小さくて見えにくいのが、当佐井寺の郷土史上、重要な役割を持っているものと考えて、拙いながら間違ひも多からうと思うが、以下少し述べさせていたこう。

別図のごとく正面に「伊射奈岐社一座」右側面に「佐井寺村」下の台石正面中央に「菅広房建」と刻まれてあるのがおぼろげながら判読できる。

当時（享保年間）古来の神社に対する、尊敬の念に乏しく、自然と社寺の湮滅（いんめつ）甚しく、祭神の誤り伝えられ（当神社においてもある時期には当時の権力者に対する便宜上、春日明神と称えられていた）ているのを嘆いた碩儒、並河誠所（贈従五位）ほか

二、三の有志が奔走し、当時の摂津の内の二十社を調べ、元文元年（二百二十七年）の六月幕府の当時の寺社奉行、大岡越前守忠相に上申して、これが実行方万端を大阪奉行の手に移した。町奉行松平日向守勘敬はその旨を受け、九月に二十社鎮座の村々の庄屋、年寄等を招き、かねて石屋さんに調整せしめておいた、一定規格の社号と村名を刻んだ石標を各々の代表に手渡し、これを村々に持ち帰って建立すると共に、その正しい由緒伝来に基づき、村々においては、益々神祇の尊崇を図るべき旨を申し渡した。庄屋年寄達は、自分らの村々に御鎮座の産土神（うぶすながみ）に対し、箔を付けてくださった。この有難い計らいをうやうやしく拝受し、各村に持ち帰って建立（こんりゅう）にとりかかり、これが全部終わったのは、翌元文二年、今より二百二十八年前のことであつた。

村それぞれに厳肅な竣工除幕の式典を挙げられたことであろう。時代は変り星は移るとも、当時これに携われ、現に努力された人々に対し、満腔の敬意と感謝の念と呼び覚ますべく、市当局及び当町有志の方々の善処してくださることを念願してやまない。

さて題名の「菅広房」氏はこの建碑奔走の途中、元文元年正月その完成を見ずに、当村の大庄屋であつた、「谷」氏宅にて客死なされ、同家の厚意による自然石の墓が、今も谷家三十数基の傍わらに建てられてある

が、誰一人として訪ずれるものもなく、ただいたずらに風雨にさらされているのには、胸に迫まるものがある。



現在の石標（復元後？）

昨秋祭り前に、ある子供ののために折られ、すぐに修復して下さったが元の位置と直角に変わっているので復元して欲しい。でないと台座の「菅広房建」の刻銘と合わない。

その碑の位置はこの度新築された、佐井寺会館前道路の向い側の小高い敷地に建てられてある。敬神家であり、一家をなした学儒であつたであろう同氏の人となりは、残念ながら未だに判らない……というのが実情らしい。

しかしこの墳墓といい、神社境内の碑石に、氏の姓名がハッキリ刻まれていることにより、この碑石の建立に当り、異常なまでの努力の傾倒を惜しまれなかった氏の、隠れた功績者であつたことには間違ひない。いつの世にかまたこれを究明してくださる史家と、チャンスの到来してくれる日のあることを、心から待ち望んでいる。

私はこの小さなあまり目立たない碑に関心を寄せてくれている人の、あまりにも少ない現状を思い、せめて市の文化財保護の方々によく調査していただき、後世に伝えるべく、保存顕彰の道を講じていただきたいことを、衷心より重ねてお願いいたす次第である。

右文中に、「羽倉敬尚氏」著書「摂津国二十社の顕彰碑に就いて」の記事中から、若干引用させていただいたことをここに記しておく。

伊射奈岐神社前のコマ狗について



前に述べた「伊射奈岐社一座」の石碑のすぐ前に一対の石狗がある。台石の裏手に、「文化七年庚午稔（かのえうまのとし）九月十七日（旧曆秋祭りの日）奥祐貞建之、石工、吹田、定七」と刻まれている。

奥祐貞氏は現奥与右エ門氏の宗祖父？に当る人で「次に男の子が授かりますように…」と日夜の祈念の甲斐あって男児を分娩せられ、そのお札にこの石狗を寄進せられたもので、いつとはなしにこのコマ狗（いぬ）にもいろいろな話題が秘められるようになった、そのうちの一つ二つを拾ってみよう。



これはごく最近といっても十年くらい前の出来ごとであった。

或る日の昼間のこと、ある農家に空き巣泥棒が入り、若干の品物を盗まれた。家人や近所の人たちが騒いでいる最中に、外出先から戻ってきたその家の姑（しゅ

の置き手紙を残して家出した。

これを見た家人は仰天し、早速足どめの祈願をしたとか。いずれもそれらの結末については、いちいち詳らかではないが、足止めの願いごとはよく聞きとどけてくださったらしい。なんだかこの話もとりとめのないような、頼りない気がせぬでもない。私はこういう迷信がかったことは大嫌いだであるが、それかといってこれを貶（けな）したり、責めたり、否定したりするような気持ちにもなれない。

私は、やはりこの町に残る、数ある伝説の一つとして、いついつまでも温存しておきたいものと思う。古来我が国は「神の国」と称えられ、われわれの祖先は、仏教渡来以前から純朴な神の教えを受け、八百萬（やおよろず）の神々の御庇護に依存してきた純朴な民族であった。

まして佐井寺は、古来純農の集団であったから、家内の息災安全はもとより、農作の成長、稔りの豊かでありますように…と願う心情もいぢらしく、日夜このころの安らぎをも求めたであろう、その明け暮れの純情さが推し測られる。

こうした日々の繰り返しによって、感謝と励みの心が湧きいでて、ひと日ひと日の激しい労働もさして苦にならず、よくいそしんだことであろう。

うとめ）さんが、この始末を聞くや、「警察より先に、お宮様へ願ひ申さねばならぬ」と早速と走り、このコマ狗に「足止め」の祈願をした。後刻、家人が警察へ届けに行くと、賊は既に捕まっていたという。

近郊の人達は、古くからこのコマ狗を『足どめのコマ狗』と称えて、そのあらたかな靈驗を信じていた。これもこのコマ狗にまつわる話であるが、昔も今も青年達の心理は変わらないものらしく、そろそろ親の手を離れて、一本立ちが出来る頃となると、今の言葉でいう『欲求不満』の連続となり、それが昂じると、無断で家を飛び出すという仕儀になる。

そこで始めて親も気がつくわけだが、とりわけ母親の心痛は、傍（はた）で見る目も痛ましいものがある。過去幾度かのこうした出来ごとに対して、思案にあまつた母親は、早速と願いごとを書きつけた紙切れをコマ狗の脚に結びつけて祈願した。その願いは言うまでもなく、可愛い息子が思いあまって自殺をしてくれぬよう、一日も早く氣をとりなしておして、母の懐（ふところ）に帰ってくれるように、との涙ながらの切なる願いごとであったであろう。

こういう話もある。相思相愛の一組があった。今とは違つて当時の掟（おきて）は厳しく、「とうてい許してはもらえないから、あの世で添いとげる…」と